

結晶体へのメッセージ

柳原 正樹（富山県立美術館）

ひとつの作品が出来上がるまでには、いったいどれだけの時間を必要とするのだろうか。そしてその作家は、その時間の流れの中で何を思っているのだろうか。漠然とそんなことを考えながらガラスの作品の前に立っていた。

それは、つめたく内なる光を放ちながら、まるで鍾乳洞の中で生成された石灰華、あるいは巖冬の洞窟で生まれるという氷筍にも似て、静かで透明な存在感をもって空間に位置していた。彫刻でもなく、立体造形として受け止めるべきものでもなく、ただ物体の空間的な出来事として角永和夫の作品がそこにあった。

角永がガラスを素材に制作を試みはじめたのは、15年ほど前のことになるが、その間、多くの試行錯誤がなされ、この塊としての作品が成立したのである。

ただ、ガラスという素材は、あまりにも多様な表情と工芸的な要素を持ちすぎており、造形表現の材料として作品化するには多分に危険性も孕んでいた。

彼としては、型枠や吹きガラスといった従来の技法を避け、ひとつの方法論へと至る。それは、ガラスを溶かし、垂らす作業工程をこなすシステムを構築することであった。装置である溶解炉で溶かされたガラスは、細い糸のごとく下に落とされ、冷え固まろうとするガラスの上に溶けたガラスが連続して重なり、徐々に渦をまくようにフォームが形成される。

1450℃の高温で溶かされたガラス

という物質は、いわば無形であり最小限の行為にさらされることによって、ようやく形になることへの条件が整う。溶解と落下の作業は二昼夜行われ、その後、4カ月の時間をかけてガラスは冷やされ作品となる。角永は物質の根源的な存在を見極めながら、その変貌をシステム化させることによって自身の芸術言語を確立したのである。

この作家は元来、手技を多用した作品を作り出すことはなかった。当初の作品は、木や紙、竹などの素材としながら、極力技法を排し、素材そのものの特質や変化していく様相を作品とした。このガラスの作品においても角永の姿勢は一貫している。彼の言葉をかりるならば「私の作品はプロセスアートなのです。単純な方法論から作品が出来上がるのです」と。

さて、このたびの個展だが、19年ぶりの東京での発表となる。角永はその間、何も制作していなかったわけではない。ロサンゼルスを拠点にオランダ、スウェーデンなどで精力的な活動をつづけていた。2001年6月よりロスを出発にいくつかの所で展覧会が予定されている。つまり、日本での発表をひかえていたと言ったほうがいいのかもわからない。それは日本への沈黙であり、決して作品化への沈黙ではなかった。美術界や時代の変動に翻弄されることなく、ただ自身の追及するシステムをさらに問いつづけることが、角永和夫の芸術姿勢なのである。